
【茨城県教育研修センターメールマガジン】「きたやま通信」Vol.5 [2023.8.25]

※本センターメールマガ「きたやま通信」の配信を個人で希望される方は、こちらのQRコード(もしくはURL)から、教育情報ネットワークのアドレスでの登録をお願いします。



<https://forms.gle/UGNXEb9q5ysYwGBG8>

また、本メルマガを多くのお知り合いの教職員の方々にご紹介いただけますと幸いです。

【ラインナップ】

■1 研修室点描

- ◇1 問題行動等を未然防止! 育てる教育相談研修講座
- ◇2 「データ」を活用・分析する力を育む算数・数学科授業力向上研修講座
- ◇3 学校教育の情報化推進リーダー研修講座第1日
- ◇4 研修支援訪問(教育の情報化) 稲敷市教育委員会
- ◇5 研修支援訪問(教育相談・生徒支援) 神栖市立大野原西小学校

■2 センター事業のご案内

- ▼ 高等学校理科における「学びと評価の一体化」に関する公開講義
- ▼ 研修支援Ⅱ期の募集

■3 参考資料等のご紹介

■4 推挽録(編集に寄せて)

■1 研修室点描

- ◇1 問題行動等を未然防止! 育てる教育相談研修講座



○期日 7月6日(火)

○人数 小・中・高・特 63人

○内容 ・事前視聴動画 講義「問題行動等の未然防止の理論と方法」

・講義・演習

午前「授業に生かす教育相談」文教大学 会沢信彦教授

午後【Aコース】「構成的グループエンカウンターによる児童生徒のよりよい人間関係づくり」

【Bコース】「クラス会議による児童生徒が安心できる学級づくり」

○受講者の声

- ・未然防止の観点が、授業づくりや生徒たちの日頃の関係づくり等、様々なことにつながっていると改めて考えることができた。
- ・目の前で問題行動が起きると、つい良くしようと治す意識で対応に当たっていた。今後は子供たちを支えていく意識と分かろうとする意識で関わっていきたい。
- ・「治そうとするな、わかろうとせよ」の視点を常に意識しながら子どもたちにとって、安心される先生となり、安心安全安寧の学級を作っていきたい。

○教育相談課より

会沢彦彦教授の講義・演習は、どの先生も食い入るように受講されていました。先生方は「児童生徒は、普通の授業においても、教員の働きかけ次第で主体的に学べるようになる」ことを確信し、授業観の転換への志を共有してくれたようです。児童生徒の自己肯定感や自己有用感を育みながら、学習意欲の向上、引いては、学力の向上につながる風土づくりが広がることを期待してやみません。

◇2 「データ」を活用・分析する力を育む算数・数学科授業力向上研修講座

○期日 7月25日(火)

○人数 小・中・高 33名

○内容

①講義 「データ」を活用・分析する力を育む授業改善 茨城大学 小口 祐一 教授

②実践発表 「データ」を使った授業づくりの実際

《小学校》鈴木雄五先生（水戸市立国田義務教育学校）

「統計的問題解決教材の開発と実践ー長距離走のペースに批判的思考を働かせてー」

《中学校》山田雅一先生（茨城町立明光中学校）

「問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を育成する数学科学習指導の在り方ー中学校数学科『データの活用』領域における、データを用いて問題解決する活動を通してー」

《高校》山田夏望先生（岩瀬高等学校）「『データ』を使った授業づくりの実際」

③「データ」を活用・分析する力を育む授業づくりの工夫に関する研究協議

○受講者の声

- ・データの活用の授業の際には、身近なデータとビッグデータを組み合わせる中で子供たちが、批判的思考力を育められるよう、授業を組み立てていきたい。
- ・取得したデータをどのように表現するのかについて、さまざまなアプリの使い方を勉強することができた。またデータカードを並び替えることでヒストグラムを作成する方法は、ぜひ実践したいと思った。

○教科教育課より

- ・小口教授の講義は、統計教育について、理論に加えて体験をとおして実践を学ぶ内容で、先生方は ICT 端末やデータカードを使って演習を行いながら、授業づくりのアイデアについて学びを深めることができました。
- ・実践発表、研究協議をとおして、小中高それぞれの実践事例を共有することができ、また、データの活用・分析領域における系統性を学ぶことができました。
- ・統計は、科学、ビジネス、社会科学など多岐にわたる領域で活用されている手段であり、情報の分析や意思決定の基盤となる重要なスキルです。VUCA の時代を生きる子供たちにとって必須の資質・能力と言えます。この

資質・能力を子供たちが身に付けられるよう、データの活用・分析領域における授業の進め方について、今後も受講者の先生方とともに考えていきたいと思えます。

◇3 学校教育の情報化推進リーダー研修講座 第1日

○期日 7月25日(火)

○人数 29名

○内容 ・学校教育の情報化推進のためのリーダーの役割に関する講義・演習 今度 珠美 先生
(一社・メディア教育研究室代表理事、日本デジタル・シティズンシップ教育研究会副代表理事)
・デジタル・シティズンシップ教育の進め方と実際に関する講義・演習
・デジタル・シティズンシップ教育の実践に関する演習・研究協議

○受講者の声

・端末を利用することに重きをおくのではなく、ICT を利用してよりよく生きるための資質を向上させることを目標にすることを、校内で周知徹底できるよう、研修などに務めたい。

・今度先生は、情報モラルの教材を扱いながら、「みんなで仲良く 楽しく 便利にインターネット社会に参加しましょう」という呼びかけをされていた。これが、デジタル・シティズンシップにつながる考え方だったのだと思う。参考になる資料を提供してもらえてよかったです。

・生徒自身がインターネットとどう向き合うべきか、それをどのように理解してもらおうか等、内面からのアプローチを考える非常に良い機会となった。現場で共有し授業で実践していきたい。

・これから新しい時代を生きる子供たちに必要な能力であるので、自校で共有し、子供たちのみならず、職員の資質向上を目指していきたい。一度だけの学習でなく、繰り返し何度も取り組み、行動するための手順と方法を身に付けさせたい。

○情報教育課より

・デジタル・シティズンシップのポイントや、一人1台端末時代にオンラインで行動するための手順と方法、デジタル・シティズンシップ教育の段階的育成方法などを学び、実践に向けた具体の検討を行いました。

・小中高特の各校種から、新規採用から間もない先生、ベテラン、管理職の先生まで様々な方々にご参加いただき、文字通り多様な知見の共有を図る大変貴重な機会となりました。校内での普及・促進にリーダーシップを発揮して下さることを期待しています。

◇4 研修支援訪問(教育の情報化) 稲敷市教育委員会(会場:稲敷市立沼里小学校)

○期日 7月3日(月)

○人数 30人(市内各校のICT校内推進教師等、稲敷市 StuDX 推進協議会の研修として)

○市の研究テーマ

「主体的に学習に取り組み、できた喜び、学ぶ楽しさを実感できる児童の育成」～ICT を効果的に活用した学習活動の充実を通して～

○研修のねらい

デジタル教科書をはじめとする ICT を効果的に活用した授業づくりについて研修を深め、市内各校へ伝達し、その普及を通して、稲敷市教員の ICT 活用指導力向上に資する。

○内容 ・授業公開(算数・外国語)「学習者用デジタル教科書を活用した授業」

・研究協議「ICTを効果的に活用した学習活動の充実」

(学習者用デジタル教科書を活用した授業づくり)

○参加者の声

・学習者用デジタル教科書を授業で活用するイメージをもつことができた。講義の中で紹介された事例を実際にやってみたいと思う。

・ICTを効果的に活用するには、単元（本時）のどこで、どんな活動のときに使うことが効果的かを精査して位置付けていくことが重要であることを学ぶことができた。具体物のよさ、デジタルのよさを吟味し、適材適所での活用となるよう、授業づくりを行っていきたい。

○情報教育課より

受講者の皆さんの多くは、デジタル教科書の魅力に触れたことで、授業のダイナミズムを向上させ、生徒たちの学習意欲を引き出す展開を工夫しようとする意欲を湧かせてくれたようでした。今後は、研修内容をICT校内推進教師が自校に普及することで、市内の教員のICT活用指導力向上を目指していくとのことです。デジタル教科書の普及・活用をとおして、稲敷市各校が授業の質の向上を果たされるよう期待しております。

◇5 研修支援訪問（教育相談・生徒支援） 神栖市立大野原西小学校

○期日 7月14日（金）

○人数 25人

○内容 ・「話し手」と「聴き手」に潜む関係性

・児童との関わり方について考える

・アドラー心理学の理論をもとにした声かけ

○受講者の声

・普段の生活の中で自分に余裕がなく言ってしまう「毒語」をもっと意識して変換していく必要があると思った。

・「毒語」の中には自分がよく使っている言葉も含まれていたのが、「はっ」とさせられた。子供の心を傷つけない言葉かけを意識していきたいと思った。

・日頃はできて当たり前で、できていない事に目を向けていたと反省する機会となった。アドラー心理学を意識して、良い面に光をあてて児童と接していきたい。

○教育相談課より

・これまでを振り返りながら、児童との関係づくりの再構築に真摯に向き合う姿が見られました。具体的な態度や方法を身に付けてくれたことと確信しています。今後、児童の気持ちに寄り添い、信頼関係をさらに深めてくれることを期待しております。

・学校では、コロナの不安が徐々に薄れ、徐々に子供主体の行事などの活動が復活してきたようです。これに対し、「自他ともに、特に児童間での思いやりの大切さを再確認させたい」とのお考えをお聞きました。2学期から、先生方の児童に対する関わり方が児童間においても良きモデルとなってくれることでしょう。

■2 センター事業のご案内

▼公開講義のお知らせ（教科教育課）

高等学校理科における「学びと評価の一体化」について公開講義を開催します。

特に、評価問題等の学習評価の工夫と授業を連動させて改善を進めるためにどうするか、学んでいきます。

普段の授業を問い直す、またとないチャンスです。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

【講師】国立教育政策研究所学力調査官 神 孝幸 様

【日時】令和5年9月 19 日(火) 12:30~14:30

【場所】Zoom によるオンライン

詳細・お申込みはこちらをご覧ください。

<https://www.center.ibk.ed.jp/wysiwyg/file/download/1/3149#page=1>

▼課題を抱えている学校・教育委員会を応援します!(研修支援委員会)

令和5年度研修支援に関する事業の「Ⅱ期」を募集します。期間は9月1日(金)から8日(金)までです。この機会をぜひご活用ください。詳しくは次の URL よりご確認ください。

<https://www.center.ibk.ed.jp/%E6%A0%A1%E5%86%85%E7%A0%94%E4%BF%AE%E6%94%AF%E6%8F%B4/%E6%A0%A1%E5%86%85%E7%A0%94%E4%BF%AE%E6%94%AF%E6%8F%B4/%E6%A6%82%E8%A6%81%E3%83%BB%E6%A7%98%E5%BC%8F>

■3 参考資料等のご紹介

▼夏休み明けの不安に寄り添う!(教育相談課)

休み明けに学校モードになかなか戻れないことは、児童生徒にも教員にもあり得ることです。特に苦しさを抱えていそうな児童生徒に対しては、焦らず、短時間からでもよいので、耳を傾けてあげませんか。その際には、是非、次の「面接の基本的な技法」を参考にしてみてください。

<https://www.center.ibk.ed.jp/wysiwyg/file/download/1/131>

▼イノベーションとの調和。AIと共に歩むためのガイドライン(情報教育課)

文部科学省より「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」が公表されました。主に対話型の文章生成 AI について、学校関係者が現時点での活用の適否を判断する際の参考資料として位置付けられています。この先、教育の在り方を変えるかもしれないともいわれている技術です。是非ご確認ください。

https://www.mext.go.jp/content/20230704-mxt_shuukyo02-000003278_003.pdf

■4 推挽録 (情報教育課・工藤)

▽先日、生成 AI に関するオンラインセミナーに参加した。内容は、あるテーマに沿ったプレゼンの構成案を ChatGPT に作らせ、その案から別途無料の生成 AI サービスを使ってプレゼン資料を自動で生成させるものであった。業務への導入の是非は別として、十分に実用的なレベルのもので、人間が自力で作成するのとは比較にならないほどの効率化や作業時間の短縮、アウトプットの多様さ・量の増加に驚かされた。

▽米ゴールドマン・サックス(GS)は、3月、“ChatGPT などの生成 AI が既存の職業の 3 分の 2 に影響を与え、全体の 25~50%の業務を代替し、世界で 3 億人のフルタイムの仕事を自動化し得る”との予測を公表した。ビル・ゲイツは自身のブログで「産業界全体がこの技術を中心に方向転換することになるだろう」と公言した。同じようなことが 2014 年にもあった。英オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授らが「20 年後までに人間の仕事の約 50%が人工知能ないしは機械によって代替され消滅する」との予測を公表したが、当時は実感が湧かなかった。なぜなら、AIは高度なプログラミング言語に精通した一部のエンジニアにしか扱えなかった

からである。しかし、今回は違う。

▽ChatGPTは、技術的な知識など一切必要とせず、人間が普段話す“自然言語”で、しかも日本語で簡単に操ることができ、文章、画像、映像、音楽、プログラムなどを自在に生み出す。その様を目の当たりにすると、GS やゲイツの言葉に素直に納得せざるを得なかった。同時に、対応の必要性に焦る一方、言語能力や問いを見いだす力、物事を的確に定義する力がますます重要になるであろうことも痛感しつつ、私たちの生活や働き方をより良い方向に大きく変える可能性があるAIに対して大きな期待を抱いた。3年後、5年後、AI と無縁でいられる可能性は低いであろう。普及のスピードは加速し、保護者や子供たちの受け入れの方が速いかもしれない。

▽迫りくる現実に対して無関心が一番危険であると言われる。著作権法等の遵守、情報の真偽の確認、情報の漏洩対策、悪用の防止、情報の新しさの確認などには細心の注意を払いつつ、冒頭のセミナーのように様々なモノやサービスとの化学反応による新たなアイデアの誕生に心躍らせながら、国や県のガイドラインに沿った形で、ぜひ積極的にかかわっていきたい。